

レクチャーの記録6:『つくられていく地域ー揖斐郡・池田町での実践』

The Document of the Lecture 6 : Creating our Community - A Practice In Ikeda Town, Ibi County

土川修平（岐阜県揖斐郡池田町・土川商店経営）

TSUCHIKAWA Shuhei

前林：これからわたしたちが創造活動に取り組んでいくときに、土川さんが池田町で展開されている活動はとても大きなヒントになるんじゃないか、そういう直感から、いつかじっくりお話を伺いたいと考えていました。今日はこちらでスライドを進めながらお話を伺っていきたいと思います。それでは最初に「土川ガーデン」を始められたきっかけからお話いただけますか。

土川：はじめまして。だいぶ顔見知りの方もおられて少し話しにくい感じもありますが、よろしくお願いします。土川ガーデンを始めたきっかけはいくつかあるんですけど、高校教員になって二校目に赴任したのが郡上北高校で、その同じ職場の人たちの何人かが魚釣りが好きで、「ここに土地を買って山荘をつくっていつも集えるような場所にしたいね」という話がありました。私が20代のときで、今から40年位前です。そして荘川村の一色というところに土地を買って「ほうば美荘」という山荘をお金を出し合ってつくったんです。そしてそこを「一色国際自然学研究所」とたいそうな名前をつけて、そこで魚を釣ったり、お酒を飲んだり、中には学位を持った人が昆虫の研究をして論文を書いたり、季刊誌をつくったりとかしていました。やがてぼくが岐阜に転勤してなかなかできなくなってしまって、そんな中でこんなことの続きがやりたいなという気持ちがありました。あとは、ぼくが30代のときに米国のアイオワ州にいく機会があってそこでホームステイをしたんですけど、「いいところがあるから連れて行ってあげる」と言われて連れて行かれたのが広大な牧場で、そこでみんながいろんなものを持ち寄りながら、納屋ではバンドの演奏をしたり、野外パーティがあったりとその雰囲気がとてもよくて、いつかこんなことが出来るといいな、という思いもありました。

前林：（スライド）これが、今年四月にIAMASのモチーフワークで土川ガーデンを訪れたときの様子ですね。そしてこれがそこで栽培されているブルーベリーです。なぜ、ブルーベリーを栽培することにしたんですか。

土川：ご存知だと思いますが、ブルーベリーって一度にではなく少しずつ熟していきます。ということは収穫期が長くて、五月の終わりから九月まで収穫できるんです。

前林：今年はどれくらいの人が訪れたんでしょうか。

土川：どれくらいかなあ。ここは来て食べるのはただなんですよ。入園料がないんです。なので知らないうちに来て食べている人もいて、結構な人が来ていると思いますよ。まあいくらでもただで食べていいんですけど、商店でアイスクリームのひとつでも買ってくれると有り難いんですが。

前林：（スライド）そしてこれが土川ガーデンにある石窯ですね。

土川：思いつきですけども、火のあるところには人が集まるだろう、ということなんです。最初は焚き火を囲んでバーベキューでもやればいいと思っていたんですが、石窯があるともっといろんなことができるんじゃないかということで、つくったんです。経費はだいたい五千円くらいでできますので。実際に出来もよくてなかなか評判はいいですよ。ぼくにしてみれば上手に出来ていると。なんでも美味しく焼けますよ。

前林：そういうった野外パーティにはどういうふうに人が集まってくるのでしょうか？

土川：どういうふうなんでしょうね。ぼくは一応 Facebook やホームページで案内を出したり、知っている人には声をかけるんですが、半分以上は会ったことがない人が来てくれるんです。ともだちのともだちのともだち、というような口コミで来てくれる人が多いんです。

前林：（スライド）そして最近では土川ガーデンにコンテナの図書館をつくりましたね。この狙いは何だったんでしょうか。

土川：一番のきっかけは、「ほうば美荘」をつくったメンバーのひとりが亡くなって、その蔵書をあげるって言われて、それをみんなで利用できる場所を考えたいというのがひとつ。もうひとつは、ぼくは人がコンピュータで情報を得る姿よりも、公園なんかで子どもたちが本を開いて読める姿、風景というのがすごくいいと思っているんです、そういう風景をつくりたいというのがありました。

それと、ぼくはいろんなイベントを企画をするんですが、イベントというのは一過性なので、その一過性を乗り越える文化的な活動を考えてみたかった。一日や二日のイベントではなくて、それを越えて文化の薫りを地域に漂わせる方法はないか、ということ考えたんです。利用者は近所のこどもたちが一番多くて、学校帰りに「秘密の場所へ行く」とお母さんに言っただけでこのコンテナ文庫にやってきます。

前林：それでは土川さんが企画されてきたイベントをいくつか紹介させてください。まず「草の根文化交流サロン in SEINO」というものですが、これはどういう経緯で始められたんでしょうか。

土川：もともと「ぎふ草の根交流サロン」というのが岐阜にあるんです。それはもう 200 回くらいやっているんです。誰かを呼んでは、その人の話を聞き、懇親会を行う。そこで関心のある人同士がつながり合っていくというのですが、岐阜だとなかなか遠いし、そこでは一定期間の展示ということが出来ないの、まさに一回のイベントで消えていってしまう。

そこで展示も出来て、発表の場もある、西濃地域でそういうものが出来ないかということを考えたんですね。

あとぼくが感じているのは、作家さんたちの発表の場が少ないということです。こういう人がこういう活動をしている、というのを知ってもらう場がなかなかない。そういう場所を保証してあげられたらいいなあというのがひとつ。会場とかチラシとか万単位の金額がかかるところを、そういう負担を少なくすることができないか。そして、そういうことに関心のある人同士がつながり合っていく場所が大事だと思ったんです。それはどういうことかと言うと、作家さんたちがやっている文化活動が社会に対してどういう役割があるのかということ考えたときに、彼らは未来へ向かって新しい価値観を提案する役割を担っている、と思うんです。そうならば、この人たちの活動を保証して発表してあげることこそ、この人たちの提案が世の中に知られていくことになるんだろう。個人でギャラリーを借りてやっていく、というのはなかなか大変で、そういうことをクリアしていくためにもサロンのような活動があつていいのかなと思うんです。

前林：それではもうひとつ、土川さんが行っている活動に「池田山麓クラフト展」があります。全国から工芸作家が集まってくるかなり大規模なイベントだと思いますが、これをはじめられた経緯などお聞かせください。

土川：これをやろうと思ったのが、ちょうど十年位前ですね。ぼくが大垣北高から大垣工業高校へ転勤したその年に考えました。文化の薫りが漂う空間とか、景色とか、そういうものをつくりたいという想いがありました。このレクチャーシリーズの二回目にお話された黒川大輔さんがクラフト作家でもあるので、彼からこういうものがあるよという話を聞いて、やってみようと思ったんです。

前林：それにしてもかなり大規模なイベントですよ。資金面、運営面でもかなり大変にみえるのですが。

土川：参加される作家さんは150組ぐらいで観客は大体13,000人ぐらいの規模です。実行委員は30人くらいなんですけど、手伝う人はどんどん増えてくるので期間中動いているのはそれ以上の数になります。協力企業については、例えば自動車学校などは養老線本郷駅から会場までのシャトルバスを無料で提供いただいたりと、そういう形で運営しています。

ここで大事なことは、ぼくはイベントをやるときに、視点というか目的を明確にする必要が絶対あると思っています。そうしないと協力は得られません。漠然とではだめで、できるかぎり明確にします。ぼくはその目的を四つ挙げます。ひとつは地域にとってどういう効果があるのか。もうひとつは参加する作家さんたちにどういうメリットがあるのか。さらにお客さんにとってどういうメリットがあるのか。最後にひとつ、これが一番重要なんですけど、社会に対してどういう効果があるのか。この四つを常に確認しながら、あらゆることにこの四つの観点を照らし合わせながら運営をしているんです。

前林：最後の「社会」というところについてもっとお話を聞いてみたいと思うのですが、おそらく後でこのことに触れることになると思いますので、もうひとつ、土川さんが企画さ

れた「願成寺古墳群美術展」というものですが、これを先のクラフト展と合わせて開催していることとか、そもそも古墳でアート展示を行おうとした狙いはなんだったんでしょうか？

土川：まずその原型として、私の住んでる宮地というところには神社があって、その境内で野外彫刻展をやったのが最初だったんです。それを三回ほどやって、それから願成寺古墳に移っていくんです。なぜそんなことをやったかと言うと、クラフト展の中で「アート」という部分をきちんと押さえたいと思ったからです。イベントというのは案外、安きに流されてしまうところがあって、その中である一定のクオリティというのを保証したい、それがこの美術展になるんです。私の家のギャラリースペースでクラフト作家の中でも特に熟練の職人の技を見せる展覧会をやり、神社の境内では現代アートをやり、その間をクラフト展でつなぐ、そういう構造を考えました。

その後、大津谷公園というところにクラフト展の会場が移ったので、野外美術展も隣接する願成寺古墳群に移したんですが、実は最初から野外美術展はこの古墳群でやりたかったんです。なぜそう思っていたかと言うと、古墳というのは千数百年前の遺産ですよ。で、現代アートというのは現代から未来を見据えて発信していくものです。千数百年前の遺産にこれからの未来を示唆する作品が置かれるその空間は、過去から未来への時間の流れを具現化する、体感できる空間になるんじゃないかと考えたんです。

先ほど「イベント性を克服する」という話をしましたが、イベント性を克服するというのは一過性を克服するということで、それは一過性を越えた「広がり」をもたせるということになります。「広がりをもたせる」にはふたつ視点があって、ひとつは空間的な広がりをもたせるということ、もうひとつは時間的な広がりをもたせるということです。空間的な広がりとは割と簡単ですが、時間的な広がりをもたせるのが非常に難しい。何かいい方法がないかと考えていたときに、過去、現在、未来へという時間の流れというものが具現化できればその一過性を乗り越えるヒントになるんじゃないかと。もちろん、これだけではなくて、展示の中で子供たちにワークショップを体験してもらうことも将来に向かっての時間を克服する手段にもなるんじゃないか、そういうことを考えています。

前林：この古墳群美術展に対する地元の方々の反響はいかがでしたか？

土川：この場所に行く機会が増えた、とは言われてますよね。あとは見方が変わったとか、いい意見もたくさんもらっていますが、逆に、古墳というのはもっと神聖なものなのでこれでいいのかという批判の声もありました。でも大半はいい評価をもらえたのではないかと思います。先ほど言い忘れましたが、古墳で美術展をやった理由はもうひとつあって、ぼくはもともと歴史の教員なんですよ。それもあって、史蹟の保存というのをずっと考えてきました。なぜ史蹟を保存しなければならないのか、どうしたら史蹟が保存できるのかというのは、今の経済効果と合わせて考えるとなかなか難しいんです。保存しろ、保存しろと言ってるだけでは保存はできないんです。それがある程度の経済的効果、現代の社会にとって具体的な形で効果を生まないと保存はできない。では、どうやって史蹟をこのままの形で残しながら経済的効果を生むのか、池田町にたくさんのお客さんが来るのかということを考えたときに、「美術展」という形によって、史蹟そのものには手を加えずに「開発」を行うという、ひとつの例を提案したかったというのがあります。

前林：これまで三つほど土川さんが池田町で行ってきた文化的なイベントについて紹介させていただきましたが、もともと土川さんが高校教員をされていたにも関わらず、これらの活動を始められたきっかけについてお話しいただけますか。

土川：今言われたように、ぼくはもともとは高校の教員でしたし、県の役人だったこともあります。それで土日ほとんどなく一生懸命仕事をして家に帰るのは十時を過ぎる、というような形で仕事をしていました。そんなとき、私が45歳くらいだったんですが、父親が亡くなるんです。私の家は150年ぐらい続く雑貨屋なんですが、お店をどうするかという岐路に立たされました。店を閉じてしまうか、ぼくか女房が仕事を辞めて店を続けるか、そういう選択を迫られることになりました。いろいろ考えた末、ぼくはここで生まれて生きてきて、ぼくでこの商売は五代目になるんですが、ぼくがこれを辞めてしまってもいいのかなと思いました。かと言って、雑貨店なんて続けても採算が合わないんでこれだけでは生きていけない。それなら、高校の教員をやりながら出来る範囲で店主の母親を助けて続けていこうと。ただそのとき思ったのは、高校の教員をないがしろにすることではなくて、「教育」というのはどんな形でできるのではないかと、ということだったんです。教壇に立って教鞭をとる、それも確かに教育ですが、土川商店を支えながらも「教育」はできるんじゃないかと思ったんです。

でもそうすると引き換えに、ぼくはもうこの場所から出れない、ということになるんです。転勤してどこか行くとか、何かを調査して転々とするということは一切出来ない。ここに根付いて生きていくしかないんです。そのときに思ったのは、この地域から、どこにでも通用する価値観を発信したいと考えたんです。場所は池田町であろうが揖斐川町であろうが大垣市であろうがどこであってもいいんです。そこからもっと普遍的な価値観みたいなものを発信しようと考えました。

クラフト展をやったとき、長野県とか山口県とか遠いところから来られた方が「わたしの故郷の風景みたい」と言ったんです。多分、それはどこにでもある、誰にでも通用する普遍的な価値観ですね。そういう舞台を、たまたまぼくが住んでいるところから発信しているつもりなんです。その土地に根付きながらどこへでも通用するものを発信したい、という想いがありました。

前林：今言われた「普遍的な価値観」というのは、先のクラフト展における四つの重視するポイントのうちの「社会に対する効果」ということと関連してくるのではないかと思います。その価値観とは社会というものをいかに持続的なものにしていくか、ということと関連してくるのでしょうか？

土川：それは難しい質問なんですが、ものすごく簡単に答えたいと思います。例えば、とっても素敵なお芝居を見たとき、ぼくは歌舞伎が大好きなんですが、そういう素敵なるものを観て、「ああ、いいな」と思ったとき、人は善人になるんじゃないでしょうか。「ああ、今日はいい芝居を観たな、いい音楽を聴いたな」と思うと、満員電車に乗ってても前に立っているおばあさんに席を譲りたくなるんですよね。ゴミが落ちてたら拾ってもいいな、と思うとかですね。優れたものにはそういう力があるんですよね。芸術とかアートってそういう

力があると。これが広がっていけば、そういう社会が出来てくるんだろと思うんですね。もうひとつは、大げさな話ですが、芸術とかアートは、これから人類がどういう方向に向かっていくのかということを示唆することにもなるんじゃないでしょうか。

ぼくも勤めていましたから言うんですが、行政とかは今ある社会を守ろうとする、今の社会を維持しようというところだと思うのです。人は、一人で生きるのが一番簡単なんですが、もちろん一人では生きていけないので、何人かが集まって社会をつくっていく。そうすると、誰かが我慢をしながら生きていかななくてはいけない。つまり、個人が自由にやりたいようにはできなくなる。それでも個人は中でもっとも自由に生きる方法を探っていく、それを繰り返しながら歴史は動いてきたんです。ぼくは歴史の教員だったんですが、ぼくの捉え方では、個人と集団がいかに調和をとりながら存在していけるかということ、その経過が歴史だと思うんです。

今の社会においても個人と集団のあいだに当然うまくいかないことがいっぱいあるんですが、「もっとこうしたらうまくいくんじゃないか」という新しい発見によって歴史が動いていくと思うんです。「これでいいよ」としてしまうことは今の状態を固めてしまうことになってしまう。歴史を動かしていくには「今、これおかしいよ」とか「これ変じゃない？」というメッセージを汲み取っていく、認めていくということが重要だと思うんです。そのメッセージをアートや文化活動が発信しているんじゃないか。

前林：そこで、固い言葉で言うと「市民の主体性」というものが重要になってくるということになりますか。

土川：そうですね。ただ行政を否定するというのではなくて、本当の意味での行政との協同ということが重要だと思うんです。市民活動だけでは限界があるんです。来年はクラフト展というのは行わないんですが、なぜ行わないかというのは単にぼくの都合からなんです。個人のことで出来なくなってしまいうんですね。そこに行政の力が入ると、そういう部分が保証されます。うまい具合に市民と行政とのいい関係が出来上がっていくといいんじゃないかと思います。

前林：それでは話題を変えて、学校という場を離れた「教育」というのを模索されてきたというお話でしたが、これまでの経験から、何か手応えがあったという点がありましたらお聞かせください。

土川：それもどう答えたらいいか難しいんですが、どうなのでしょう。学校というのは高校までというのは一斉授業ですよ。個別的な指導というのは部活動とか特殊な場合になります。つまりどちらかといえば全体に対する教育というのが大きい。あとは、学校というのは建前の社会で、建前を教えている。でもそれはすごく重要なことです。ぼくは日本人の「本音と建前」の使い分けはいいことだと思っています。本音と建前を上手に使える人というのがとってもすばらしい人だと思うんです。昔は建前の部分は学校で教えて、本音の部分は地域社会で教える、というものだったと思うのですが、今、地域社会が崩壊していつているので、学校の中で本音と建前の両方を教えることになってしまった。そこで学校の負担が増えて大変苦労していると思うんです。そこで地域社会がしっかりすることで、本音の部分を地

域に任せられるようになるんじゃないか。ではぼくが何をするのかということですが、地域に根付いて、地域の教育の一端を担おうとするならその「本音」の部分に働きかけなくてはならない。そんなことができたらいいなと思っているところです。

前林：「本音」というのは「個性教育」の「個性」にあたるような部分になるでしょうか。学校は負担が増える中でその「個性」ですら「マナー」とか「ルール」のように画一化して扱わざるを得ないということですね。それでは教育の話題ということで、さらにお聞きしたいのですが、学生に何か「賞」のようなものを与えてインセンティブを高めるような教育について批判的なご意見をもっていると伺ったんですが、その詳しいところをお聞かせください。

土川：ぼくは高校で子供たちの文化活動を育てる仕事を長くやっていたんですが、例えば文化祭をよくしようとか、レベルを上げようとするとき必ず出てくるのが「それなら、賞をあげよう」「一番とか二番とか順位をつけよう」という話です。ぼくはそれには反対してきて、担当である間はそれをさせませんでした。なぜかという、賞を与えることは、それによってある価値観を押し付けることになるからです。「これがいいよ」ということを与えてしまうことになる。評価する人の考えを押し付けることになる。もちろん学力を計ったりすることは別ですが、文化活動について評価をするというのはなかなか難しいのではないかな。技術を評価することはできても、価値を評価するというのは難しい。学校としてひとつだけそれが許されるのは、高校生たちが未熟なので大人の立場から俯瞰して賞をつけて評価するという立場はあるかも知れませんが。

前林：多くの場合は、賞を与えることが価値観を押し付けたり、固定する方向に働いてしまうということですね。さて、ここで話題を変えて、土川さんは、野原桜州という日本画家の研究家でもありまして、この画家を通して明治後期から大正、昭和初期にかけて価値観が大きく変わる中で「近代化」がどのように受け止められたかについて考察していらっしゃいます。それについてお話を伺いたいと思います。

土川：野原桜州という人は明治 10 年代に生まれました。西欧文化が入ってきて、日本が近代化されていくので当然、絵画にも影響が入ってくる。そういう時代に生きていた人で、昭和の初期に 47 歳で胃癌で亡くなります。ぼくがこの人になんで注目しているかというと、実はこの人と同じ年に生まれた有名な人がいて、藤村操（ふじむら みさお）というんですが、ご存知でしょうか？藤村操という人は華嚴の滝からわずか 16 歳で飛び降りて自殺したんです。この人は一高で夏目漱石の教え子でもあるんですが、「人生は不可解」という言葉を残して死んでしまった。彼がなぜ死んだか、いろんな説があるんですが、西欧文化が流れ込んできたときに、自分というのは、個人というのはなんだろう、ということに悩んだ末だったと言われています。そのとき、日本の若者たちは大きな影響を受けるんです。同い年であった野原桜州も当然のことながら、影響を受けていると思います。

人間って、個人ってどのように生きたらいいのか？それまでは国のために生きるというのが立派だと言われていたのが、個人主義という考えが入ってきて、非常に悩むことになるんです。桜州は中学を卒業して今の東京芸大に進みます。そして日本画的な日本画から、西洋画の雰囲気をもった日本画へと変わっていく。「価値観」というものを人はどのように受け

入っていくのか、自分の価値観というものがどうやって出来ていくのか、外からの価値観をどういう風に自分のなかに取り込んでいくのかということ、言葉ではなくて、作品の中から読み解いていくんです。言葉はむしろ、嘘がつけてしまう。自分の都合のいいように整合性をとってしまったりする。でも作品はそうはいかない。そういうことをまだまだ途中でですが読み解こうとしているんです。

前林：確かに桜州の作品を見ていくと、中には不気味とまで言えるような、そういう特異な印象を与える作品もあつたりしますね。それは、土川さんの言われる近代化という価値観との葛藤や、明治後期から昭和初期までの非常に密度の濃い時代の変化を表しているのかもしれない。ここに倉数茂著の『私自身であろうとする衝動』（以文社、2011）という、関東大震災から大戦までの様々な芸術運動について書かれた本があるのですが、これもまさに芸術作品からその時代を読み解いていく試みなのではないかということで紹介しておきたいと思います。

それでは、最後の話題に移りたいと思うのですが、土川さんのところにはいろんな人たちが絶えず集い、いろんなつながりをつくったりしていて、しかもそれが自然な形で起こっているように見えます。そこがいつも興味深いと思っています。土川さんのところでは、句会もあれば、先ほど紹介したサロンという催しがあつたり、ガーデンでパーティをしたりと、いろんな人たちの集まりのレイヤー（層）が微妙に異なりつつも、たまにそのレイヤー同士が出会う瞬間があつたりする。そういうつながりのあり方について何かお考えになっていることがあればお話しいただけないでしょうか。

土川：いや、みんな勝手にやってるんです。土川ガーデンには畑もあって、みんな勝手に来て勝手に耕して栽培して、勝手に収穫していきます。ぼくがいなくても勝手にやります。これをなんて言うんでしょうね。わからないですね。

前林：先月のレクチャーで、豊橋技術科学大学の岡田美智男先生にお話を伺ったんですけども、そのとき「弱さ」について、あるいは「自立と依存」のあり方についてお話をされました。「自立」というのは、実は依存できる関係性や選択肢をどれだけ多くもっているか、ということであると。そのような見方で土川さんの活動を見たとき、どこか共通する点を感じてしまったのですが。

土川：それを聞いたときに、なんか、あ、そうなのかと思いました。ぼくはなににもできないんですよね。文化とかアートとかいいながら絵も描けないし、音楽もできないし、不器用でものをつくることもできない。ぼくがなににもできないから、いろんな人がやってきていろんなことをやってくれるのかなと思うんですよね。クラフト展にしても美術展にしてもぼくが一生懸命になってが一っとやるんじゃないくて、おそらくぼくは「やろう」と言うぐらいかも知れませんが。そうするといろんな技術をもった人が来て、やってくれるんですよね。今はそういうような形でできているんです。ぼくは小さい頃からそうだったんですが、友達が三人いると、必ず会話に加われなかったんですよ。わーっとみんなが話しているとき、ぼくはポツンとしてしまう。多分、「弱い」んでしょうね。だからみんなほっとけないのかもしれない。

前林：その「弱い」ということも実は逆説的な意味をもっているような気がするんです。さて、これで本当に最後の話となるのですが、これは土川さんの教え子にあたる方で、宮川さとしさんという方が描かれた『母を亡くした時、僕は遺骨を食べたいと思った。』（BUNCH COMICS）という漫画があります。そこに土川さんが最後の授業で話されたことがエピソードとして描かれています。「我々は死に向かって生きている以上、皆寂しくて当たり前」というようなことを話されたということですが、ある意味これはわれわれの「弱さ」の究極的なあり方のように思えます。そしてそのことは「自立」や「社会」を考える上で多くの示唆を与えてくれるお話でもあるように思うのですが、もう少しこれについて聞かせていただけないでしょうか。

土川：これだけ見ると、前後がないので誤解を生じる話かもしれませんが、これはぼくの加納高校での離任式の日、担任していた二年生の子たちが「ちょっと来てくれ」と言うんで行ってみると、特別に教室を用意してそこに集まっていて「ここで最後のホームルームをやってほしい」と言うんです。なんにも準備をしていなかったものですから、不意打ちみたいなもので、咄嗟に話したのがこの話なんです。話したのはここにある通りで、「人間は、はかなくて弱い存在で、そのことについては平等なんだと。だからこそ自分たちがひとりではなく、みんなで生きていくんだ」ということを伝えたかったんです。彼がそのように受け取ってくれたかどうか。でもこういう漫画にしてくれたことはなにかが印象に残ったということなんでしょうね。この子は、あとで知ったんですが、大学に行って三年生のときに白血病になって生死をさまよって、骨髄移植によって治るんだけど、決まっていた就職はできなくて、それから塾の先生をやりながら漫画の勉強を始めるんです。だから生きるとか死ぬとかいうことを、ぼくらが思う以上に考える時期を過ごしたんじゃないかと思うんです。

前林：まだまだ聞きたいことはたくさんあるのですが、今日はここまでということで興味深いお話をどうもありがとうございました。